

幼稚園 四十年(二)

菊池ふじの



保育のこと

保育案 子どもというものに対して口のきき方もわからなかった私、ましてや幼稚園の教育実習の経験もない私に、毎日の保育案の立て方などわかるはずはなかった。しかししあわせなことに、私の受けもった海の組と同じ年長組の山の組の担任の崎山茂先生(結婚されて堀内と改姓)はまことに純粹な気持の方で、ときどき青い空を見上げては空の空気を胸いっぱい吸いこんだり、星を眺めては悠久の彼方に思いをはせるていの夢みる人であったから、私のような新米の保姆を面倒がらずに親切によく教えて下さった。

土曜日にはきまって来週一週間の週案をつくるのであったが、いつもいっしょに考えて下さり、先生の組といっしょの案にして下さった。あす使う教材も、どんなにおそくなってもいっしょに準備して下さったものだった。いま思ってもああいう

人柄の友を得たことは、何もわからないで就職した私にとつて、この上もないしあわせなことであったと思っている。

あの頃の保育項目は、明治三十三年の小学校令の中に幼稚園に関する規定が定められてあり、遊戯・唱歌・談話・手技の四項目であった。だから保育案をつくるときはこの保育項目を主にして考えたものだった。例えば、四月はじめ(四月第一週目)の予定案は次のようなものだったとおぼえている。

月 唱歌・遊戯(山の組といっしょに雀の学校・桃太郎さん
鳩ぼっぼ・牛若丸・かいぐり)(律動ゆうぎ)
くび飾りづくり

火 おはなし—ころりん爺さん・指太郎

自由画

水 折り紙

木 唱歌・遊戯(雀の学校・桃太郎さん・鳩ポップ・かいぐり
切り紙 自由)

金 おはなし―天狗喰い・小人の笛

ぬりえ ゆりの花

土 粘土 自由

このような案を立てて実施しているうちに、自分で疑問が起こってきた。その一つは、

唱歌遊戯の新しい教材はどれぐらいの期間に一つだしたらよいか、ということである。いろいろ考えたり、人の意見を聞いたりして、二週間に一つの割合で新しい教材を与えたい、ということに自分で決めていた。もっとも相手の子どもの発達や理解の状態とか、その期間に何か突発する事情ができて、二週間に一つということは絶対的なものではないが、原則としては、二週間に一つの新しい教材という心組みにしていた。

それから、おはなしの材料であるが、子どもたちは一つでは満足せず大抵は二つぐらい求められたので、予定も二つぐらい用意することにしていった。とすると一年間に、いや二ヶ年間の在園期間に話してきかせる童話の数は膨大なものになる。あの小さい子どもたちの頭の中にそのようなたくさんのおはなしをきかせることはいいことだろうか、似通った筋のものがあつたりして却って混乱するのではないだろうかと思つた。そこで私は、古くから伝唱されてきた文化財としての童話を、日本のもの、外国のものの中で、よい童話として伝わってきているもののある程度の数にしぼって話してきかせることにした。日

本のものではこれとこれ、外国のものうちで、グリムのもではこれこれ、アンデルセンのものではこれ、イソップではどうふうに書き出し、自分なりの系統を立てた。そして幼児時代にきかせておきたいと思うものを年齢にしたがって順序立て、自分としてのいわば童話のカリキュラムを立てておいた。切紙にしても、ぬりえにしてもこのようなことにしていた。まもなくぬりえは及川先生の「ぬりえ」が出版されるようになったのでそれによることにした。

とにかく自分の頭にもつていた教育の理想とか原理などと、現実の毎日の幼児の中にはいつての保育とは別個のもので結びつかない。心の中にその余裕がないのだ。

この幼稚園に就職した動機には、幼児というものが心に浮かんでいなかったが、こうして子どもの中にはいつてみると、こんな新米の、何も知らない自信のない先生を、ひたすらに信じきつてよってくる子どもたちのあのまなざしにはすっかり感動させられてしまつて、就職の最初の日(大正十三年四月八日)の日記に、「私のそばによつてきて、私を見上げているあのあどけない子どもたちの顔が何といつても可愛い。腹立たしく思つたり、憎らしく思つたりすることがありうるだろうかときえ疑われる。この幼児たちに接してみても、おぼろげながら、今後の自分の仕事に対しての想像がつく。

唱歌も遊戯も、童話もピアノも、その他いろいろの遊び方も、学ばなければならぬことが山と迫っている。しかしもうあせるまい。計画や予定などまるで見当がつかない。万事崎山先生にお頼りすることにすると記してある。

いきいきした子どもたちの中にはいると、子どもたちと遊ばないではいられなかった。遊ぶごとと、幼稚園のいわゆる教材を勉強することに無我夢中であった。二ヶ年ぐらいは子どもが帰ったあとでも自分の組の保育室にいて、その日の子どもものしたしごとを整理したり、あすの準備などに熱中したりしていたように、その頃の職員室でのことなどが話題にでもちつとも知らないことが多い。

こうして毎日子どもたちの中に入って遊ぶことがこの上もなく楽しいことになった。就職して子どもたちに接した瞬間、エゴイスチックな就職の動機などはすっかり吹きとんでしまつて、子どものことを考えることばかりであった。

こうして子どもたちと遊んでいるうちに、次のようなことが理くつでなしにわかつた。

一つは「子どもの活動は結果を予想し期待してするものではないこと。子どもは活動それ自身がおもしろいのである」ということである。

そのころは関東大震災のあとなので、園庭のいたるところに釘の端とか、瀬戸ものの一部だけが地面に見えているのが、そ

ちこちにあつたものである。それを見つけると、子どもたちは、ひとりりで、ときには四、五人のグループでそれを掘りだすことをはじめる。埋まつてるものの正体がわからないので、棒ぎれを持ちだしたり、自分たちの指の光をまつ黒にし、ひたいに汗してまでそれはそれは苦勞して掘りだす。やつと正体がわかると「こんなものがつかりした」などという子は一人もいない。そんな表情もしないで、さつさとその場を引きあげて次の活動へ移る。毎日こういう光景を見てつくづく思ったことであつた。現代の子どもたちも砂場などで、このような光景を見ることがよくある。

それからもう一つは、子どもというものは「自分のいおうとすることを先生にいつて、きいてもらえば満足するのだなあ」ということである。

私の最初に担任した組に、ちよつとおませで、少し意地悪で、他の子どもがすることが気になつてどうにもならないという子がいた。この子の告げ口は、いま考えてもひどいものだった何ごとにつけても私のところにいいつけにくる。

新米の私はなんと答えてやればいいかわからなくて、おいそれとは返事ができないでいる。するとその子は、私の返事を待たないで、さつさと向うへいつてしまふ。こういうことが毎日である。こういうことを繰り返しているうちに、

「ああ、子どもというものは、いいさえすれば気が満足する

のだな。もっともいつともそうとは限らない、またいつもこのよ
うな取り扱ひだけをやることには大いに問題があるのだが、あ
る場合には、子どもはいいさえすれば気持が満足するものだ
な」ということを、毎日の幼児との生活で学ぶことができた。

子どもとの生活で学んだことは数えきれないぐらいたくさん
あるのであるが、新米の第一学期には、いま述べたようなこと
が、思い出の中に大きく浮かんでくる。

行啓の思い出

何年ごろからあったのかは知らないが、女子高等師範学校に
は「行啓」ということがあった。ときの皇后陛下が学校へ親し
くおいでになり、生徒の勉学の様子や、演技をごらんになつた
り、陳列展示してある作品をごらんになったりあそばす行事で
ある。四年に一回行啓になるのがならわしであった。これは行
啓四年のあいだに、誰でも一回はこの光栄に浴すことができる
ようにということである。四年に一回あるのだときいている。ところ
が私たちの四年生の秋にあるはずなのが、関東大震災のため園
中が混乱しており、学校も借家住いの有様であったから到底陸
下をお迎えするなどの事情ではなかったことから、私たちの在
学中は一度もなかった。それで一年おかれて大正十三年の十月
二十七日（月）に行啓ということになったのである。

こういうことには一度も出合つたことがなかったので、どう

いうことになるのか、どういうことをするのか皆目見当がつか
ない。ただ先輩の先生方のなさることを見ながら、そしていっ
ていただくままに準備をしたりして、この行啓を感激深くお迎
えしたことであった。この行啓について忘れられないことが
二、三ある。

一つは掃除のたいへんなことだった。ブラックではあるがで
きたばかりであるからと思うのだが、壁は薄いコンクリートの
板にクリーム色でお粗末に塗つてあるのを貼りつけたようなも
のであるし、床は新しい材木ではあろうけれども、人夫さんた
ちの地下足袋の跡がしみこんでいる上に、壁を塗るときはクリ
ーム色の塗料が、床の至るところにぼつりぼつりと大きな球状
の跡を残しているのだから汚い。掃除は床を全部あく洗い
するのだった。みんなはだしになって石鹼液をバケツで床や廊
下にまき、四、五人が大型の床ブラッシで床を力いっぱいこす
りながら段々進む壯観、今でもあの光景が目につく。床は乾
くと白っぽくなるし、地下足袋の跡や、塗料のあとがいきわあ
ぎやかになるので、却つてきたなくなつたような気持ちさえして
いたが、行啓のときはこのような大掃除をするものらしい。こ
のような大掃除はまる二日ぐらいいしたであらうか。

それからもう一つは、行啓のときにする保育の内容について
である。私の組は「ぬりえ」をすることになった。いよいよ行
啓の当日になって、私の組に玉歩が進められた。そのとき一人

の女兒は椅子に浅く腰かけていたとみえる。陛下は、

「あなた、椅子からおつこちますよ」と仰せられて、その子の椅子をなおして下さったことである。それから、この際保育室の一隅には、ござを敷いておままごとコーナーをつくっておいただのである。このころのままごと道具はいたって素朴なもので、木でつくり黒くぬった粗末なへっついとおわんの小さいものと、小さいままごとの包丁、まないたなどがあった。それからすり鉢もあって、葉っぱを庭から取ってきてはすり鉢ですって、水を加えることがとてもうれしく、すり鉢ですってあそぶことがはじまると、子どもたちは生き生きしてきて、いつまでも飽きない。こういうあそびが流行っていたときであった。新米の私は子どもたちのあのいきいきした遊びを行啓の際お目にかけて「おままごとには水を使わせたい」といいた。ところがこれには先輩の諸先生方から猛然と反対された。

「そんな水など使わせて、その色水が陛下ばかりでなく女官の方の裾へでもはねたら、どうするの？」という声に新米の劣等は涙を流して服してしまった記憶がある。若さの至らなさと今になってよくわかる。

それから奉迎奉送の莊厳といおうか、ものものしいといおうか非常に感動したものであった。このようなことが頭に浮かんでくる。

このような行啓ということは、大正十三年十月と、大正十四年十一月（開校五十周年記念式典）昭和五年三月、昭和九年十一月（開校六十周年記念式典）昭和二十四年十一月（開校七十五周年・お茶の水女子大開学記念式典）の前後五回、この光栄を浴したことになる。

幼稚園令の公布

幼稚園令の公布については、いろいろの方が述べておられる。公布は大正十五年四月二十一日。奇しくも幼稚園の始祖フレールベルの誕生の日である。もともと、この日本の幼稚園として始めて独自の法令を發布するという画期的な事業を、特にこのフレールベルの日にわざわざえらんだのかも知れないが、そこまで考え及ばすことのできない私などは、あまりの意義深い偶然に衿を正したものだ。

この幼稚園令の公布によって、今まで四つの保育項目だったものが「観察」という一項目が加わって五項目となったのである。この後は保育五項目となり、幼稚園教育のただ一つの拠りどころであった。この保育五項目は戦争前までつづいたのである。

ここで「観察」が加わったというので、当時の幼児教育界は大きわぎをしたものだった。明治三十二年から何の変化もなく平穩につづいてきた保育の四項目にここで観察の一項目が加わ

ったということ、今までは埋もれていて人の注目を惹かなかった幼稚園がこのころになって漸く人々の心に目覚めてきたということも重なったのであろう、祝賀の会が三日間ももたれたのであった。祝賀式での伯爵、林博太郎博士の祝賀の講演・沢柳政太郎会長の祝賀の挨拶などが印象的に残っている。

祝賀のパーティーは帝国教育会館であったと記憶しているが、幼児教育界挙げての祝宴で、卒業したての私にはまことにはなやかな晩餐会で、このときに出席するためになげなしのお金で、お召の単衣を新調したあのときの感激がいまも、まぎまぎと胸によみがえってくる。

このころ倉橋先生にお手伝いをして「幼児の教育」を編集していたのであったが、この新たに加わった「観察」は、その後しばらくのあいだは「幼児の教育」の中心課題となり、理論に実際に賑々しく論義がかわされたものであった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

歌

和

松木ゆきの

菊の花を見て描く児ら

咲きほこる八重菊かこみ描く児らは

いろとりどりに美しくして

菊の花を見て歌う

咲きにおう八重菊かこみ児らのむれ

うたう姿ぞ愛らしくして

園外の寺にて落葉拾い

古寺のいちょうに遊ぶ幼児たち

手に手にみつるいちょうたばねて

(香川県観音寺幼稚園)